

## 英国 18 世紀エロティカと小説の勃興

吉田直希

近代以前、エロティカ(性愛文学)の読者は主に上流階級に限定されていた。それが 18 世紀になるとしだいに幅広い層に受け入れられるようになる。なかでも新興の中流階級が主たる購読者となっていった。Ian Watt によれば、この中流階級の台頭は小説という文学上の新しいジャンルを生み出した。さて、エロティカは小説というカテゴリーに含まれるのだろうか。答えはノーである。中流階級の経済的・道徳的価値観を損なうエロティカは、たとえ形式的に小説の体裁をとっていても、まともな小説としては認められなかった。隠れたベストセラーであったわけだ。エロティカはこっそりと小説の下に置かれ、この新興のジャンルに取り込まれたり、時に排除されたりしながら命脈を保ってきた。したがって、正統の「小説」と異端のエロティカ、その両者の交渉が小説という新興のジャンルを生み出したと言えるだろう。本論では、階級縦断的なエロティカが中流階級の主体形成にいかなる影響を与えたのかを考察してみたい。

どうしてエロティカが中流階級に受け入れられたのか?その理由は Michael McKeon の小説理論によってある程度説明がつく。McKeon は Watt のように中流階級と小説の誕生をストレートに結びつけはしない。彼はジャンルの混淆こそがこの時期の社会と文学の特徴であると考え。つまり固定化した中流階級といったものは存在せず、上流階級に反発すると同時に憧れの感情を抱く「揺れる」中流階級がエロティカを必要としたのである。異種混交を重視するこのような議論にしたがえば、18 世紀エロティカこそがこの階級に最もふさわしい文学ジャンルとなるはずなのだが、McKeon も Watt と同じように、エロティカを黙殺する。なぜか?それは、彼がエロティカに内在するラディカルな反「階級意識」を十分に意識しているからである。18 世紀エロティカの階級縦断性は、つきつめるとメタレベルから「階級」それ自体に対して異議申し立てを行うことになりかねない。そうなるとう当然のことながら、小説や階級といったジャンルの諸起源を探る彼の歴史主義自体を根本から問い直す必要が生じるだろう。

ではエロティカの脱 - 階級的視点を分析するには何を参照すべきか?それは Jürgen Habermas による公共性の概念である。Habermas の議論は、現実社会とは異なる次元の「公共圏」という領域を設定し、近代的ブルジョワ主体がそこで確立されたというものである。公共圏内部では、個々の成員の立場は平等であり、特権的な階級は認められない。対等の資格でさまざまな議論がなされたのである。とはいえ、全ての人が単一の思想を唱えていたということではな

い。そこでは、異種混交を特徴とする多種多様な会話が交わされており、いかなる啓蒙的精神も理想的な主体像もつねに娯楽的パロディの対象となり、「自由に」書き換えられてきた。規制の対象であったエロティカも自在にその姿を変えてベストセラーとなっていたのである。本論では、批判と娯楽の混交をエロティカの一つの特徴として捉え直し、1740年代以降の小説をエロティックに読み解く可能性を検討する。まずは、17世紀後半以降イギリスに出現した公共圏＝コーヒーハウスを出発点とし、そこでのジェンダー、セクシュアリティに関する議論を検討する。その後、18世紀前半の小説とエロティカの関係を経典的なジャンルの崩壊という観点から考察してみよう。

コーヒーハウスは17世紀後半から18世紀にかけてイギリスでは主にロンドンで流行した特異な公共空間である。コーヒーというエキゾチックな飲み物を提供するこの建物の中では、タバコの煙が立ち込め、新聞や雑誌を手にした男たちが、時に大声を上げて時事問題について議論し、また片隅では耳打ち話をしながら、商取引を行っていた。この公共圏において、それまでにない規模で階級間の交流が起こり、上流階級に対する反発と憧れを同時に持つ中流階級が形成されていく。Lawrence E. Kleinによれば、コーヒーハウスとは上品な公衆（polite public）を構築するための場であり、1688年以降は特に宮廷・教会に代わって「礼節」(civility)を社会全体に広める役割を担っていたと考えられる。従来の、伝統的な権威の力が低下し、それとともに、新たな施設（institution）がそれまでの上流階級の道徳的規範を実践する場として登場したというわけだ。この礼節をめぐる論議がジェンダー、セクシュアリティの概念と深く結びついているのだが、この点を確認するために、初期のコーヒーハウス論争を見よう。

ロンドンにコーヒーハウスができて間もなく、コーヒー摂取の功罪について議論が起こっている。次に挙げる二つの引用は、コーヒーがセックスに与える影響について、女性陣／男性陣に分かれて意見を述べ合ったものである。

The Occasion of which Insufferable Disaster, after a serious Enquiry, and Discussion of the Point by the Learned of the Faculty, we can Attribute to nothing more than the Excessive use of that Newfangled, Abominable, Heathenish Liquor called COFFEE, which Riffing Nature of her Choicest Treasures, and Drying up the Radical Moisture, has so Eunuch our Husbands, and Crippled our more kind Gallants, that they are become as Impotent, as Age, and as unfruitful as those Desarts whence that unhappy Berry is said to be brought. (*Women's Petition*, 2)

Coffee collects and settles the Spirits, makes the erection more Vigorous, the

Ejaculation more full, adds a spiritualescency to the Sperme, and renders it more firm and sitable to the Gusto of the womb. (*Mens Answer*, 4)

前者は、コーヒーを飲みすぎる男性の性力が著しく低下している点を嘆く女性の訴えである。これに対して、男性はこの意見に真っ向から反対し、コーヒーによって精力絶倫になれるのだと主張する。もちろん、こうした論争が実際に女性と男性の間でなされたとは鵜呑みにすることはできないだろう。ここでは、女性が本当にコーヒー（ハウス）に対して否定的であったかどうかが問題ではなく、コーヒーが医学的な見地からという体裁をとって、セクシュアリティの問題として論じられていた点を確認することがむしろ重要であろう。コーヒーハウスという公共圏は、階級を縦断する「性」をめぐる議論によってまずは誕生したのである。

このような歴史的な文脈の中で書かれたのが、Jonathan Swiftの“Hints towards an Essay on Conversation”である。ここでは、セクシュアリティに関するあからさまな言及はされておらず、女性らしさ／男性らしさというジェンダーが主題となっている。

If there were no other use in the conversation of ladies, it is sufficient that it would lay a restraint upon those odious topics of immodesty and indecencies, into which the rudeness of our northern genius is so apt to fall. And, therefore, it is observable in those sprightly gentlemen about the town, who are so very dextrous at entertaining a vizard mask in the park or the playhouse, that, in the company of ladies of virtue and honour, they are silent and disconcerted, and out of their element. (Swift, 349)

女性との会話（conversation of ladies）が、ジェントルマンとしての礼節を増進するために必要であるとするこの提案は、*Women's Petition* 等に見られるような性的な議論が公に行われていたことに対する一つの反応であろう。こうして、コーヒーハウスに代表される18世紀前半の公共圏において、階級とともにセクシュアリティとジェンダーが、しかも男性のジェンダーが重大な関心事となっていく。男性のジェンダー意識に関して大事なものは、（1）女性との会話によって男性が女性化するとともに、象徴としての「女性」像が形成されていったこと、そして（2）男性の女性化を押し進めようとする一連の運動に対して、これに抵抗する力が徐々に強まっていったことの二点である。

まず（1）女性の象徴化とはどのようなものか？先ほどのSwiftからの引用にあるように男性は女性（ladies）との会話によって男性本来の性質を抑制し、下品な猥褻さ（immodesty and indecencies）を削ぎ落としていかなければならな

い。しかし、この ladies には多種多様な女性が含まれており、女性なら誰とでも上品な会話が成立するわけではない。したがって、男性が女性との会話によって self-fashioning する際のモデルは、「男性の女性化を理想的に実現してくれる」女性でなくてはならないだろう。ただし、そのような女性は現実には存在しない。そこで、象徴的あるいは不可視の存在としての女性像が男性の主体化には必要となる。当時のコーヒーハウスを描いた絵を見てみれば、そこに女性客の姿を見つけることはできない。ただし、カウンターの内部に目をやると、そこには男性客に視線を送るコーヒーレディがまさにコーヒーハウスのシンボルとして君臨している。

象徴としての女性を意識して自らの行動を律すること、それが礼節を備えたジェントルマン、男性主体による polite public の構築を意味する。もちろん礼節を身につけることは男性にとって決して楽なことではない。礼節とは演じるものであり、一種の偽装ともいえる。男性本来の自然な (natural) 性質を損なうこともあるだろう。したがって、このような不自然な礼節は度を越せば当然、諷刺の対象となる。例えば William Hogarth の *The Rake's Progress* では、男性の public persona に対する過剰な意識が痛烈に揶揄されている。Hogarth の作品に多く登場する放蕩者や伊達男は、女性化を極端に推し進めた男性の姿である。そして、理想的な男性が避けるべきものは、上流階級の放蕩者や伊達男に見られる女々しさ (effeminacy) である。つまり、公共圏における男性のセクシュアリティは、そのジェンダー意識に影響を与え、男性の女性化に様々な反応を引き起こしていくことになる。

つぎに、18 世紀前半における男性の肉体表象に焦点を当てて *Eighteenth-Century British Erotica* に収められている作品を検討してみよう。さきほど、男性主体による polite public の構築には象徴としての理想的女性が必要であったと述べたが、そのような女性が登場する以前、男性の肉体に関心が集まることは一般的にあまりなかった。なんといっても女性の肉体がエロティカの題材であった。しかし、男性に礼節を求める動きが広まるにつれて、男性の肉体に対する認識に重大な変化が生じてくる。

例えば、18 世紀初頭の植物学者 Richard Bradley は *The History of Succulent Plants* において、ある種の植物に認められる威厳 (dignity) を次のように讃えている。

It is wonderful to see this Plant rise out of the Earth in a Pillar-like Form, shooting directly upwards, without Leaves or Branches, till it will attain to the height of about twenty Foot. (Bradley, 1)

Bradley の植物学的記述は男性性器のサイズと逞しさを露骨に表現するエロ

ティカの描写と奇妙に一致する。(A Voyage to Lethe と Teague-Root Display'd の挿絵は省略) これら一連の作品が、男性の肉体に強い関心を寄せていること、さらに「美しさ」という基準で男性を評価している点は注目に値する。男性の肉体を描写する際にも、女性的な「美しさ」という基準が加わるようになっていくのである。しかも「女性から見て美しい」というように判断の主体が徐々に象徴的な「女性」へと変化していく。こうして女性は「性的欲望」を顕わにするセクシュアルな存在となるわけだが、この変化を John Cleland の *Fanny Hill* で確認しておこう。

この作品は形式的には書簡体小説となっている。ここで重要なのは、主人公 Fanny の視点から男性の「美しさ」を繰り返し表現しているということである。性行為を事細かに描き出すとき、女性だけでなく、男性（とその性器）にも同等の、あるいはそれ以上の関心が寄せられている。しかも「美しい」モノとして。次の Root に関わる記述は植物学の性的イメージを意識していると同時に、観察する女性の視線を見事に描き出している。

Then the beautiful growth of the hair, in short and soft curls round its root, its whiteness, branched veins, the supple softness of the shaft, as it lay foreshortened, rolled and shrunk up into a squob thickness, languid, and born up from between the thighs by its globular appendage, that wondrous treasure-bag of nature's sweets,...(Cleland, 82)

すでに見たように、象徴的あるいは不可視の存在としての女性像が男性の主体化に必要だった。もちろん、これは女性の姿が作品の表面から消え去ってしまうことを意味するものではない。むしろ女性が積極的に「見る主体」として登場し、男性を客体化することが場合によっては必要になる。こうして男性もまたジェンダー化され、従来とは異なる「見られる男性」が登場する。Fanny の視点から描かれる男性キャラクターは階級も人種も様々であるが、大事なのは「美しさ」を備えているかどうかということである。

では *Fanny Hill* の場合、男性の女性化に対する反発はどのように描かれているだろうか。理想的な男性にとって避けなければならないものは、女性化を極端に推し進めた *effeminacy* であった。物語の後半で Fanny は男色 (*sodomy*) の場面に遭遇する。彼女は旅の途中で馬車が故障し、宿屋で休息をとることになるのだが、そこで偶然、若者によるホモセクシュアル行為を覗き見る。

長い間この箇所は批判的となっており、検閲により削除されてきた。詳細な *sodomy* の描写の後、Fanny によって同性愛嫌悪、女性嫌悪の考えが示される。

...or at least were universally under the scandalous suspicion of it, she could not name an exception hardly of one of them whose character was not in all other respects the most worthless and despicable that could be, stripped of all the manly virtues of their own sex and filled up with only the very worst vices and follies of ours; that, in fine, they were scarce less execrable than ridiculous in their monstrous inconsistency of loathing and condemning women, and all at the same time aping their manners, airs, lisp, skuttle, and, in general, all their little modes of affectation, which become them at least better than they do these unsexed male misses. (Cleland, 196)

ようするに *Fanny Hill* は男性と女性の sexual な conversation を扱いながら、男性のジェンダーを異性愛関係の中で捉え直そうとした作品と解釈できる。しかもこのセクシュアリティによる男性主体の理想化は、effeminacy, sodomy を排除しつつ、ホモソーシャルな中流階級が polite public の主人公であるかのように描き出す。もちろんこのとき、女性のジェンダーも変化を伴う。「女性」というカテゴリーもまた effeminacy/femininity との関係で新たに定義し直されるわけだ。Henry Fielding の *The Female Husband* をはじめとし、この時期には男性的 (masculine) な女性に焦点を当てた作品が多く書かれているが、それは偶然ではない。これらの作品もまた、単にレズビアニズムの観点から論じるのではなく、男性のジェンダー化とともに、公共的な主体という観点から今後、解釈し直していく必要があるだろう。

さて、男性、女性双方のジェンダー化を念頭において、Hogarth の作品を鑑賞してみると、そこには従来の伝統的なカテゴリーが様々なレベルで崩壊していることがわかる。たとえば、*A Harlot's Progress* の第一図は近くの馱馬車からロンドンに降り立った Moll Hackabout を描いたものだが、Ronald Paulson はこの Moll が置かれた状況を Mother Needam と牧師との関係に言及しつつ、「ヘラクレスの選択」の構図を脱神話化するものとして解釈する。(図版は省略) ここで大事なのは、女主人公の姿に男性ジェンダーを読み込む可能性が示されていた、しかもそれは「本来あるべき」物語の人間関係を根底から覆すものであったということである。そうすることで、18 世紀の娼婦の姿をリアルに描いた作品と考えられてきた *A Harlot's Progress* もまたジェンダー、階級といったカテゴリーの伝統的な固定化を拒む作品として再評価することができるわけだ。そして、ジャンルの多様化は、中流という 18 世紀に支配的になる概念に異端的な要素を組み込む。

最後に、女性/男性ジェンダー間の交渉から見る「小説」の可能性について検討し、本論を締めくくりたい。次の二つの引用はそれぞれ Samuel Richardson の *Pamela* と Fielding の *Shamela* からの引用である。

the pretended She came into Bed; but quiver'd like an Aspin-leaf; and I, poor Fool that I was! Pitied her much.—But well might the barbarous Deceiver tremble at his vile Dissimulation, and base Designs....and my Confusion, when the guilty Wretch took my Left-arm, and laid it under his Neck, as the vile Procuress held my Right; and then he clasp'd me round my Waist! (Richardson, 203)

He was as rude as possible to me; but I remembered, Mamma, the instructions you gave me to avoid being ravished, and followed them, which soon brought him to terms, and he promised me, on quitting my hold, that he would leave the bed. O Parson Williams, how little are all the men in the world compared to thee! My master was as good as his word. (Fielding, 324)

前者はナイトキャップを被って暗がりに潜む B 氏の正体に気づかずに、Pamela が床につく有名な場面で、Pamela の美德はここで最大の危機をむかえる。女中に変装した Mr.B はここで Jewks (Procuress) の介添えをえて、Pamela をものにしようとするのだが、結局レイプは未遂に終わる。これは Pamela の激しい抵抗が Mr.B の計画を打ち砕いたためだが、Fielding は *Shamela* において第二の引用のようにこの挿話を解釈している。*Pamela* では、主人公は失神 (dying) してしまい、主人によるレイプが未遂に終わったことすら彼女はわからないのだが、Fielding は *Shamela* において牧師 Williams に対する性的な告白をもってすることによって、オリジナルのパミラがエロティックに (the pretended She) 見えてこないかと読者に問いかける。こうしてにせのパミラ (Sham+Pamela) は本来のあるべき Pamela 像を「自由な」解釈に開かれたエロティックな対象に変えてしまう。もちろんこのとき Mr.B の effeminacy が批判の対象としてクローズアップされる。

「見る女性」の男性描写がこのように作品の枠を超えて広がる時、小説というジャンルもまた公共圏のなかで異端的要素を取り込んで成り立っていたことがわかるだろう。私たちは中流文化のジェンダー表象をこのような新しい「女性」の視点に立って再検討しなければならない。そうした試みがまさにエロティックな読みの実践となるのである。

#### 参考文献

- Bradley, Richard. *The History of Succulent Plants*. London, 1716-27.  
 ---. *The Virtue and Use of Coffee*. London, 1721.

- Cleland, John. *Fanny Hill or Memoirs of a Woman of Pleasure*. Ed. Peter Wagner. Penguin, 1985.
- Cock, Samuel. *A Voyage to Lethe*. London, 1741.
- Darnton, Robert. *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*. Norton, 1996.
- Fielding, Henry. *Joseph Andrews and Shamela*. Ed. Martin C. Battestin. Houghton Mifflin, 1961.
- Habermas, Jürgen. *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*. Trans. Thomas Burger with the assistance of Frederick Lawrence. MIT P, 1996.
- Klein, Lawrence E. "Coffeehouse Civility, 1660-1714: An Aspect of Post-Courtly Culture in England." *The Huntington Library Quarterly* 59.1. (1996): 30-51.
- Mens Answer to the Women's Petition against Coffee*. London, 1674.
- Paulson, Ronald. *Breaking and Remaking: Aesthetic Practice in England, 1700-1820*. Rutgers UP, 1989.
- Richardson, Samuel. *Pamela; or, Virtue Rewarded*. Eds. Thomas Keymer & Alice Wakely. Oxford UP, 2001.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. Vintage, 1993.
- Swift, Jonathan. *The Works of Dr. Jonathan Swift*. Vol. 13. London, 1764.
- Teague-root Display'd: Being Some Useful and Important Discoveries Tending to Illustrate the Doctrine of Electricity. Eighteenth-Century British Erotica*. Vol.3. Eds. Alexander Pettit and Patrick Spedding. Pickering & Chatto, 2002. 319-39.
- Uglow, Jenny. *Hogarth: A Life and a World*. Farrar, Straus and Giroux, 1997.
- Wagner, Peter. *Eros Revived: Erotica of the Enlightenment in England and America*. Paladin Grafton, 1990.
- Watt, Ian. *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding*. The Hogarth P, 1987.
- Women's Petition against Coffee*. London, 1674.